

らあると思います。

歴史を考えるということはどういうことかと申しますと、私がよく言うのは、時間軸上、時系列上の異文化の研究なんですね。同時代における異文化の研究が相互理解のために重要であるように、時系列上の異文化というものも、多くの場合、我々のアイデンティティというものを構成しているわけです。個人としてのアイデンティティ、それから集団としてのアイデンティティというものは、時系列上の過去というものによって規定されている面が非常に強い。ですから、そういったものの理解が大変重要だというのは論を待たないと思います。中等教育段階でも、そのへんが何らかのかたちで実践に反映されていくことが理想だとは思っています。

司会（村上） どうもありがとうございました。今日は、理系お二人、文系お二人という構成で話題提供者を選んでおりますけど、周藤先生から文系ということで、理系のお二人の先生とはちょっと違って、学力低下は存在していない、中等教育は成功している。とはいえ、歴史と歴史認識の違いという点を、中等教育にどう導入するか、ということに重点があったと思います。それでは、最後に経済学研究科の根本先生のお話をうかがいます。

第4提案「中高大連携と経済学」

根本二郎（経済学研究科）

経済学部の大学生 経済学部というのは学生がかなりいるんですね。全国の大学の経済系は、商学、経営学もあわせると多くの学生が卒業して、サラリーマンになって日本の企業社会を支えている。ところが、中等教育では政治・経済とか倫理・社会という科目の授業は減っていないでしょうか。これでいいのでしょうか。しかも、大学や経済学部の方でも、中等教育で政治・経済を勉強してこいとか、倫理・社会を勉強してこいとかは言いませんね。だいたい、経済系、商学系といっても入試科目に政治・経済必修とかいう大学ってないんじゃないでしょうか。医学部では生物をとってこないのは困ったことだとか言うんだけど、経済学部の先生に政治・経済をとってこない学生がいるのは困ったことだという意見も聞かないわけですね。

先ほど、周藤先生は中等教育を否定するところから高等教育が、という話だったけれど、経済について言うと、中等教育と高等教育が断絶しているという気がする。僕はそれが非常にまずいと思っているのです。とにかく中等教育と高等教育をつなぐプログラムが必要です。そのためには大学側の努力が非常に求められますが、今日は中等教育のシンポジウムですから、高校に何を求めるかということだけお話しします。

社会科の教科のあり方についてですが、現在の中等教育の教材を全部調べたわけではなくて、ちょっと読みかじった教科書と聞きかじった情報から言っているんで、間違ってるかもしれませんが、政治・経済が「羅列型」になっているので、もっと「総合的」なものにしないといけない、ということをお願いしたいと思います。先ほどから、学力低下の話が出ていますが、学力低下が大問題だと

言ってるのは、実は経済学関係者が多いのではないかと思います。名古屋大学でも経済学の周りの同僚に聞いてみると、学力低下を否定する人は一人もいません。特にこの10年間の学力低下はすさまじいと言っています。話題になった『分数ができない大学生』の著者は3人いるんですけど、西村先生は京都大学経済学の先生で、戸崎先生は数学者ですが、京都大学で経済学の学生に数学を教える人ですね。

そういうことはよく調べないといけないことで、一つはこの10年間で経済学部を希望する学生の数が減ってるんですね。人気が落ちている。それによってそもそも受験する層の学力が下がっている可能性があるんですね。この10年間、とにかくバブル崩壊による大変な不景気で、経済、商学、経営系は非常に不人気です。一方、法学部とか教育学部とか、歴史学もそうなんだんですけど、そちらにいい学生がみんな行ってるということであって、学習指導要領がどうのこうのという問題ではないという気はします。もちろん、それは統計などで調べないといけないことですけど。

学部選択調査 高大連携に関して、これは名古屋大学学生相談総合センターが今年（2002年）の新入生全員を対象に、入学式の二日～三日後に調査したデータです。「名古屋大学に入学し、今の学部を選んだことについてあなたの気分」を尋ねたものです。全学部の平均値で見ると、38.5%が満足、31.5%がどちらかという満足で、約70%が満足している、ということです。これは時系列的にはあまり変化はない、と思います。そこで、70%が満足していればいいのかということなんですけど、名古屋大学というのは受験偏差値的価値観だけ見れば、ここに入れば成功ということなんだけれど、逆に30%の人があまり満足していないという数字です。そのことを問題にしなくていいのかと、いう気がします。

他の質問ですけど、「今の学部・学科を決めたとき、その内容について知っていたか」ということなんですけど、一応の知識があったという人が63.3%です。ところが、6.3%の人は「特に内容を知らうともしなかった」ということです。知らうともしないでどうやって学部を選んで入るのかという気がするんですけど、そういう学生がいます。さっきの「気分はどうですか」という質問についてはあまり学部ごとの差はないんですが、「内容について知らうとしたか」については、学部間に格差がはっきりできています。この「特に内容を知らうともしなかった」6.3%の学部別の内訳を見ますと、理科系は多くても10%を超えるところはありません。低いのは医学部1.3%ということですね。経済は13.8%もいる。これは一つには大学がPRというか、情報を提供していないということだと思いますが、高校生の側から見てぜんぜん見えないわけですね、経済学とか法律学というのは。知らうともしなかったというのは、高校での政治・経済の科目、授業時間が減っているということも関係あるかもしれませんが、あんまりやってもしょうがない学問という印象をもって入ってくるのではないかと、ただとにかく大学ぐらいは出ておけば就職は悪くはないから、ということだろうと思います。

さて、事前に学部の専門内容について「一応の知識はあった」「具体的によく知っていた」の両方あわせると、理科系では70%で、「ほとんど知らなかった」はだいたい20%強です。ところが、それに対して文化系はすさまじく悪い。「よく知っていた」というのは、法学部、経済学部ともに0.6%です。「ほとんど知らなかった」というのが、法律33%、経済35%です。法律・経済とも三分の一は事前に内容をほとんど知らない。

一方、入学直後の勉強に対する意欲ですが、全学平均で「十分ある」が55.2%、「少しある」が31.9%で合計87%います。「まったくない」は0.4%です。これも学部別に見ると面白いんですが、入学式直後にまったく勉強する気はないと答えた学生は、文学部、教育学部、法学部はゼロです。ところが経済学部は1.3%。これは以前から経済学部だけに回答がでるんです。全く勉強する気はないというのは、10年前は経済学部だけです。理系にも少し出ています。工学部が1.3%、農学部は1.2%で、工学部と農学部が最近急に回答パターンが経済学部に近い。つまり勉強意欲が落ちているんです。大丈夫かという気がします。経済学部では「意欲は十分ある」と答えた学生は49%です。工・農ではやはり経済と同じで50%しかありません。医学部が58%、理学部が63%、法学部が64%、他方、教育学部なんかは「十分ある」と「少しある」を合わせると100%です。いずれにしても経済学部はあまりパフォーマンスがよくない。そして、全体的に見ても「少しある」と「十分ある」を合わせて80%というのはいいのか悪いのか、という議論は必要でしょう。

最後に、これが一番大事なことと思うんですけど、履修の方法や勉強の仕方についてわかるかという質問です。よくわかると答えたのが0.8%で、だいたいわかるという回答が21.4%なんです。要するに「わからない」という学生が80%近くいるということが問題なんだと思います。勉強する意欲があるというのは合計で87%いくんですけど、大学に入ってどう勉強していいかわからなくて不安であるという回答が学部横断的に実に多いのです。

経済学教育 理科系でもどう勉強してよいかかわからないという学生は多いのですが、僕の印象では、経済学部の場合はそれをそのままひきずって勉強しないようです。工学部や理学部での勉強は非常に厳しいんですね。1年生の少人数のクラスで容赦なく試験でおとされてしまう。勉強せざるをえないところがあって、そうやって勉強の習慣が大学でついていけばいいんですけど、経済学部では1年生にいきなり200人の大講義をもってくる。いよいよこれではどうしていいかわからないという状態になって、そのままおしまいということになってしまう。その結果何が起るか。少し、都合のいい例を選んでいきますから、やや誇張して言っていると思ってください。

講義を聞いた3年生が質問に来ます。質問に来る学生が最近増えたのですが、質問の内容はかなり驚くべきもので、今日の講義のどこを暗記したらいいですかという質問なんです。これは最近の傾向です。つまり、社会科というのは暗記科目だというのがこびりついているんですね。実は日本経済学会が先月あって、そのときに経済学教育という普段はあまり考えないテーマでシンポジウムをやりました。そのときにコーディネーターが「高校の政治・経済の教科書を見たら、こんなに幅広く誰が教えるのだろうか」と発言しました。僕も見ましたが、確かに非常に幅広く浅いです。しかも前後の脈絡がない。だから、分かるわけがない、はっきり言って。

少し、日本史の話もします。昭和恐慌というのがありますが、昭和恐慌の原因は震災手形が不良債券化したというものです。だけど、日本史の教科書のどこを見ても手形が何だということが書いてないんです。政治・経済の教科書を見ると、手形について書いてある教科書もあります。ですが、手形ってどういうものかはそれだけ読んでわからない。わかるように書いてない。教科書検定の調査官は何をしてるんだという気がするくらいです。数学だと円周率が3になる。3.14なんて言っていると、少数2桁のかけ算を教えてないから3にするしかないって、もうがちがちで、とにかく横道には一歩もそらさないぞという検定をしているようですね。前後の脈絡を考えることなくいっ

たい何を検定してるのだろうと思うような内容です。経済に帰りますが、ほとんどの教科書には需要曲線と供給曲線が出てくるんですけど、驚くべきことは、需要曲線と供給曲線の交点で価格が決まると書いてあるんです。だけど、需要曲線が何で、供給曲線が何でということが書いてないわけです。これで教科書と言えるのかという気がします。これを使って教える先生はとても大変だろうと思わざるをえません。

経済学の高大連携 政治・経済だけに限定して教えるというのは限界があります。教科書一冊で何でもかんでもということになると、結局は網羅的、羅列的になって、試験は暗記にならざるをえないですね。社会科は政治・経済も世界史も地理も一体です。これを分断して考えるのは難しいです。自然科学なら実験できますからいろんな条件をコントロールできるんでしょうけど、社会科学は大学に入って読む本にしても、みんな一体性の中で書いています。

一体性ということになると、もちろん論理的思考力はいるし、一方で文章の技巧力があるわけですね。だから国語と関係するのかもしれないですけど、もうちょっとちゃんとしたいい文章、記号的にも優れた文章で書かれた教科書、しかも論理的にも話がちゃんとわかるように書いてあるような教科書で教えるべきじゃないか。そういうので教えないと大学に繋がってこないです。結局、大学に入っても社会科はみんな暗記科目だと思って、特に数式を使う経済学部の科目は極端に嫌われます。それは数学が苦手だからというのではなくて、経済学というのは暗記科目だと思ってきているわけですね。何か覚えておけば、試験に通って就職できるだろうっていうように。

じゃあ、数式を使わない分野に行けば、そういう学生たちはハッピーかということ、決してそんなことはないですね。数式をあまりつかわない経営学とか、経済史の分野に行った学生だって、指導の先生に聞くと決してパフォーマンスは良くて、論理的理解や体系的な理解がなかなかできないということです。論理的思考の訓練を高校の時から、あるいは中学校の時から始められないか。そのためには社会科諸分野の相互の垣根を取り払って、場合によったら国語も取り込んだような総合的な教材を作れないか、と思うわけです。以上です。

司会（村上） どうもありがとうございます。社会科学の一体性、断片的な知識の集積ではなくて国語あたりまで取り込んだ総合的なテキストの必要性ということですね。それではここで5分間だけ休憩にしたいと思います。

指定討論 1 「思考力の低下」

小川 克郎（名古屋大学名誉教授・前環境学研究科長）

学力と思考力 お話を聞きながら、共通のキーワードみたいなものを考えてみたのです。私自身もそのキーワードを前から考えていたんですけど、4人の方に共通するよう感じられます。それは、学力の低下、受動的な学習態度、そして体系的・総合的な理解力がない、最近の学生について皆さんがそういう印象をお持ちであると、受け止めました。